

閉じこめられたヒツジたち

——中国江南農耕社会のヒツジ飼育から見た商品經濟の發展——

菅

豊

- 一 問題の所在
- 二 特異的なヒツジの飼育形態——舍飼いとフィーディング——
- 三 特異的なヒツジの飼育目的——子売り、肥料生産——
- 四 特異的なヒツジの繁殖形態——オスの早期更新——
- 五 湖羊誕生の契機
- 六 湖羊の完成
- 七 結語——ヒツジに刻まれた歴史——

一 問題の所在

從來、文化の指標として動物をとらえる視点は、狩獵採集民、あるいは牧畜民といった動物自体を、生計維持の中心的資源として活用してきた人々に主として向けられてきた。それは、動物によつて文化をうまく読み解くために、動物がよりいっそう重要視される社会を選択した結果だといえる。家畜に関しても、牧畜社会における「牧畜的家畜」は、その文化を規定するものとして重要視されてきた。そういった状況下、農耕社会における家畜は「非牧畜的家畜」(梅棹 一九七六:八五)としてあまり注目されてこなかった。いみじくも、福井勝義が「ニワトリを生業として、いくら飼養していても、それは一部の人に限られているのであつて、その社会の生活様式が大きく規制されるということとはない。ブタもまた、世界的に広く分布している家畜であるが、その飼養は農耕民の副次的な生業においてしか見いだされない」(福井 一九八七:一一)と指摘するように、「非牧畜的家畜」は農耕文化の周辺的な存在であり、文化の本質を規制しない対象として、積極的に取り上げられることはなかったのである。

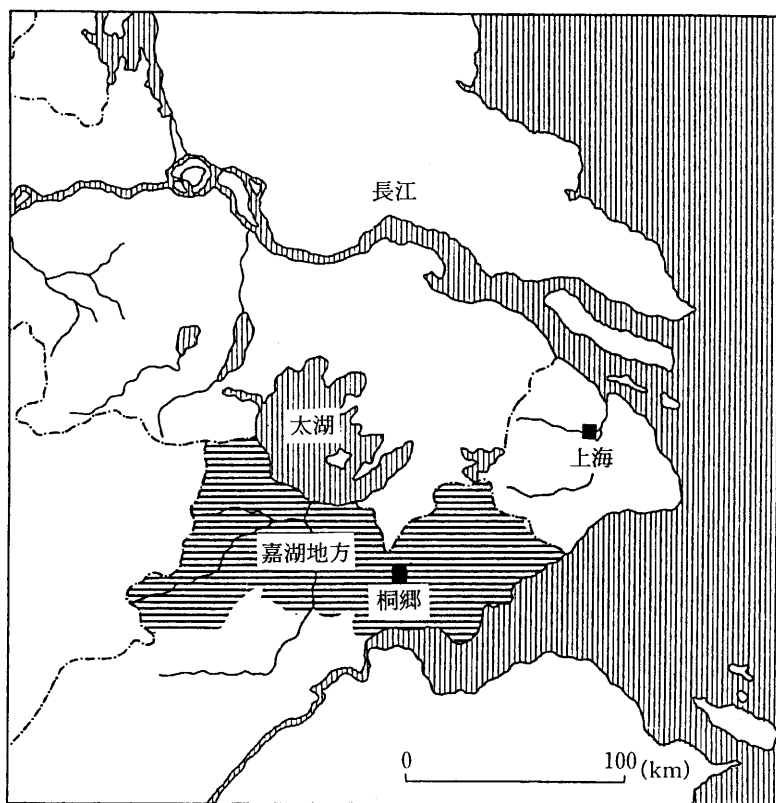
しかし、「非牧畜的家畜」は、そのように社会の生活様式を強く規制しないとはいえず、それは逆に社会の生活様式から強く規制される動物であることは間違いない。野生動物ではなく家畜であることから、それを担ってきた社会、文化と不可分な存在となっているのであり、「非牧畜的家畜」とはいえ社会、文化理解の素材として、いささかも瑕疵を受けるものではないのである。現在ある家畜は、人間の意志のもとに、長い年月にわたつて品種の改良、固定が行われてきた。その飼育形態、飼育目的、繁殖形態には、それを飼育する人々の意欲と智慧が発揮され、それを取り巻く

歴史が凝縮されているのである。

本稿で対象とする中国浙江省嘉湖地方を含む江南地域は、生業形態の分類でいうとあくまで農耕社会である。そこには、牧畜社会などとは異なったサブシステム・エコノミーの中心が存在し、登場する家畜は牧畜社会の家畜と比べ、それほど大きな影響力をもたないことが予想される。だが、その家畜はあくまで文化的な存在として、それを取り巻く社会の状況を反映しているのである。本稿は、農耕の卓越する中国江南地方において飼育されてきた、特異的な家畜―ヒツジ―の飼育形態、飼育目的、繁殖形態を、その成立過程と照合することによって、動物に刻み込まれた歴史を読み解くことを目的としている。

中国江南地方という農耕卓越地域において、「牧畜的家畜」の代表ともいえるヒツジが飼育されていることは、奇異の目をもって見られるかもしれない。確かに華南を中心に広がる農耕卓越地域の家畜飼育は、ブタやスイギュウなどの大型有蹄類や、ニワトリ、アヒル、ガチョウなどの家禽類の飼育が主体である。もちろん農耕用のウシは存在するが、それは畜力の利用に力点がかけられ、肉利用、乳利用は副次的なものであった。あくまで「非牧畜的家畜」が、この地域の家畜の特徴といえる。

そういつたなかでのヒツジ飼育は、農耕社会における家畜飼育の特質を体现しており、その理解のための重要な指標となってくれる。簡単にいうならば、この地域において本来「牧畜的家畜」であったヒツジが、「非牧畜的家畜」として飼育されているのであり、その家畜管理の論理には農耕社会の論理が貫徹されていることが予想されるのである。さて、本稿で取り扱うヒツジは、中国江南、太湖南辺地域（浙江省嘉興市、湖州市周辺のため嘉湖地方と呼ばれる）において飼育されている。この一帯は温暖湿潤の気候で、また、生業としては歴史的にみても農耕が極度に卓越した



地図1 中国江南地域と嘉湖地方

九八

地域である。この地域は牧畜地理学上「農区」に分類され、ヒツジなど「牧畜的家畜」の飼育は本来盛んではないはずである。しかし、嘉湖地方には周辺地域に比して特異的にヒツジ飼育が展開されており、湖羊^{フーザン}の名をもって品種として認定されているのである。

湖羊は浙江省、江蘇省などの太湖南部、上海周辺部などで飼育されており、その数はおよそ一七〇万頭（浙江省約七七パーセント、江蘇省約一七パーセント、上海市約六パーセント）で、中国のヒツジの一パーセント前後を占めるに過ぎない（中国国家畜家禽品種志編集委員会 一九八九・五六）。しか

し、この地域において湖羊は、資源サイクル、あるいは経済サイクルのなかに厳密に組み込まれた重要な家畜である。湖羊の飼育の中心である嘉湖地方は、年平均気温一五〜一八度で、最寒月（二月）の平均気温でも〇度前後、最も暑い七月の平均気温は約二八度であるが、熱暑時の最高気温は四〇度を超すこともある。年間降水量は一二〇〇〜一五〇〇ミリ、無霜期間は二七〇日ほどと、温暖湿潤の自然環境にある。湖羊は、このような中国において通常ヒツジ飼養の行われる乾燥地帯とはかけ離れた環境で、長期にわたって特異的な方法で飼育されたことにより、その結果、一般的な牧畜地域で飼育されるヒツジとは、大きく異なった品種特性を有するようになっている。

二 特異的なヒツジの飼育形態 —— 舎飼いとフィーディング ——

調査対象村落は主として浙江省桐鄉市石門鎮利星村羅家角村、同市梧桐鎮聯新村木橋村の自然村である。⁽¹⁾これらの村の生業は、稲作を中心に、小麦、アブラナなどの裏作、タバコ・キクなどの花卉栽培、養蚕、養魚、ブタ・ヒツジ・ヤギ・ニワトリなどの家畜、家禽飼育が多角的に行われている。また改革開放以降、二〇代〜三〇代の若者が近隣の工場へ就労したり、都市部へ出稼ぎしたりして多くの現金収入を村へともたしている。そのため、実収入に占める農業収入の割合は次第に低下している。人々は、限られた家庭内の労働力を、手間や収益を勘案しながら、一年中何らかの生産活動に可変的に振り分けている。

この地域の農業生産は、高収益を求めて労働力を複数の多角的な生業に配置するとともに、それぞれの各生業から得られる生産物、老廃物を他の生産を維持するうえで再利用し、資源のサイクルのなかに位置づけ、緊密に結合させ

あっている点において特徴的である。このような結合は限られた土地を有効に利用するための方策として考えられており、結合する空間や資源の利用系はかなり意図的に人々によって構成されている。そのため、村内の土地は、道路、家屋地、耕作地、養魚池、そして村のなかを縦横無尽に貫くクリーク（水網）などによってそのほとんどが利用され、未利用の荒蕪地は、羅家角村や木橋村において五パーセントにも満たない。このような高度な土地利用において、当然ヒツジを放牧する余剰の土地はまったく存在しないといってもよい。そのためヒツジは、屋内で完全に舎飼いされているのである。湖羊飼育の特異性は、まず第一に、この完全舎飼いという飼育形態にあるといっても過言ではない。この地方から北へ数十キロしか離れない太湖のほとり、江蘇省呉江県開弦弓村は、中国民族学において指導的役割を果たした費孝通が、一九三六年に訪ねた村である。そこで彼は、この地のヒツジ飼育について以下のような興味深い記述を残している。

「……ヒツジの飼育のおもな困難は飼料の問題にある。土地の九〇％は農業に使用されている。鎮の人が所有している墓のある数力所の小区画を除くと、ヒツジに利用できる放牧場は事実上ない。農地は囲われていない。動物が歩き回って与える損害を防ぐための柵がない。このような環境ではヒツジを放牧することは不可能である。そこで特別の小屋が建てられ、そこにヒツジが囲われている。」（費 一九八五・一三五）

「……草原の牧畜民がこれをきいたら、信じ難い、論理にまったく反することだと考えるかもしれない。このように水路が縦横に走りあぜ道が将棋盤の模様のようにとおっている水郷地帯で、どうしてヒツジを飼うことができるのか。この村にきても「馬に乗って花を見る」だけの人なら、おそらくこの副業を見逃してしまうかもしれない。というのは、ざっと見ただけでは、一頭のヒツジもないからである。しかしかつては、千頭近いヒツジを飼って



写真1 羅家角村の住居（手前の平屋がカンカー）

いた。ヒツジたちは一年中小さな檻の中に閉じこめられ、自分で草をさがしにいく必要はなく、人が刈り集めた草を与えられていた。」（費 一九八五・二一四）

費が見たヒツジ飼育についての状況は、この桐郷一带においてもまったく変わりが無い。湖羊は、生まれ落ちた後、生活のなかでヒツジ小屋から終生ほとんど、あるいは一步も外に出ることなしに、その一生はまっとうされる。湖羊が外に出るのは死んだ時か、売買、貸借される時か、屠殺される時のいずれかと考えてよい。それ以外の時は、できるだけ外に出さないよう積極的に閉じこめるのである。この地方では、もし湖羊が柵を乗り越え他人の家に入ると、その家ではバイシャーシン（白鯨星）が入ったとして、不吉なことが起こるとされている。闖入された家の主人は、この



写真2 湖羊とヤンバン

湖羊を打ち殺し厄をはらってよいが、湖羊の持ち主がこれを恨み、承伏しない場合、今後闖入された家に起こる不幸の責任を負わなければならぬとされる。そのようなことが起こらないためにも、ヒツジを完全に閉じこめておくことは必要なことなのである。しかし、このような完全舎飼いは、通常のヒツジ牧畜観で考えるとかなり異様である。もちろん、冬場の厳寒期に限定的な個人舎飼いが行われる地域は、西アジアやヨーロッパにも存在するが、完全な通年の舎飼いは伝統的ヒツジ飼育においてほとんど例をみないであろう。

この地方の家屋は細長く、おもてから奥へシャンオ(廂屋、居間兼作業場)、ツアオカー(竈間、台所兼食堂)、ワンカー(房間、寝室)、カンカー(坑間、物置兼家畜小屋、便所)の四つの部屋に分かれている。湖羊は、家の



写真3 飼料用の草刈り

一番奥の窓もない暗黒のカンカーのなかに入
れられている。カンカーのなかには奥行き約
二メートル、幅二・五メートルほどの四
角に柵で仕切られたヒツジ小屋ヤンバン^(?)（羊
棚）、フタを飼うツীবバン（猪棚）、肥料用の
人糞尿を貯める便所モーカーン（茅坑）に区切
られている。ヤンバン一囲いは、僅か約四、
五平方メートルの面積しかないが、この狭隘
な空間に夏場では四頭、冬場では五、六頭も
のヒツジが詰め込まれている。五、六頭より
多く飼う場合には、さらに別の区画のヤンバ
ンを用意しなければならない。夏場の収容頭
数が少ないのは、気温上昇に伴う熱暑病を防
ぐためである。

さて、湖羊の舎飼いという条件は当然、飼
料を人間側が毎日欠かさず供給する、いわゆ
るフィーディングという飼養形態を前提とし

なければならぬ。湖羊には四月から一〇月くらいまでは、主としてチンツアオ（青草、青草）と呼ばれる草本類と、サンイエ（桑葉、クワの葉）のあまったもの、ツアンシャ（蚕沙、カイコの糞で養魚の餌にも使う）が与えられる。サンイエとツアンシャは栄養分が豊富で、熱を鎮める効果があるという。

村に生えているおおかたのチンツアオは、何でも湖羊の餌になるといわれており、夕方ともなると餌をやるために、ヒツジの面倒をみる人（老人や主婦、子供）は、近隣の道端やクリークの脇で草を刈り集める。チンツアオは、青い葉をもつ草本の総称であり、特定の種を指し示すものではない。かなり多様な草本類を飼料に用いるものの、しかし、漫然と何の意図もなく草を採集するのではなく、湖羊の飼料として特に適している植物を確実に識別し、選択的な利用を行っているようである。⁽³⁾

一月から三月頃の冬場は、温暖湿潤な江南地域といえども生草に不足するため、八月から九月にかけて、チンツアオを大量に刈り取り、天日で二三日乾燥させて保存しておく。この干し草は、暑い盛りの三伏の季節に取るためサンフツアオ（三伏草、三伏に取った草）と呼ばれる。これは「三伏格草、三九格宝（三伏（真夏の最も暑い時）に草をきわめると、三九（真冬の最も寒い時）に宝をきわめる（得る））」⁽⁴⁾といわれるほど、冬場の保存飼料としての意味は高い。

また、枯れたサンイエも重要な冬場の飼料となる。サンイエは乾燥の後、藁で縛ってヤンイエトゥアン（羊葉團）という丸い束にして保管することもある。クワの葉の飼料的意味も伝統的に重視されており、「人要補食、羊要枯葉（人に栄養が要るように、ヒツジには枯れた（クワの）葉が要る）」と、俚諺で語り継がれるほどである。これらの保存飼料はヤンバンの上に設えてある棚に蓄え、必要な時に随時下ろして湖羊に与える。



写真4 保存用のクワの葉

クワを多く栽培する家では、カイコ生産であまったクワの葉による飼育が可能であるが、高度に農耕地を集約化しているこの地では、一般に飼料となる草の量は限定的であり、またそれを確保するための人手も限定的である。すなわち、獲得できる飼料資源量と労働量が各家の湖羊の数をある程度規定しているといつてよい。飼育頭数は各家まちまちで、最大八頭から一〇頭前後と見積もられており、それ以上の湖羊の飼育は、個人的な小規模経営による飼育形態において飼料上不可能と考えられている。

三 特異的なヒツジの飼育目的——子売り、肥料生産——

湖羊は、第一に皮革および肉生産のための子ヒツジ、第二に肥料となる糞尿、第三に成ヒツジと三つの生産物を人々に提供している。その内、特に子ヒツジの体の売買によつて得られる金銭が「目に見える形」の収益として、湖羊を飼育する直接的な動機となっている。これらとは対照的に、一般の牧畜社会で重要視される乳、成体の毛（羊毛）は、ほとんど生業経済、商品経済的な意味をもつて扱われていない。

湖羊の毛皮は、ルアンパオシ（軟宝石、柔らかい宝石）とも称され、その品質は国内、国外市場を問わず高い評価を得て、古くより移出商品として珍重されてきた。フーヤンコウピ（湖羊羔皮）のブランドで知られる羊皮は、湖羊の子ヒツジの皮である。この商品価値の高い皮を生産する目的で、湖羊はまず飼育されるのである。ただし、湖羊を飼育する農民は、直接、この皮生産に関わるわけではない。あくまで、皮革生産の原材料であるヒツジを供給する役割を担っているのみである。湖羊生産者は、町場の皮革生産の専門業者に直接丸ごと一頭売つて収益をあげるのである。

湖羊の皮は、ヒツジの年齢によつてまず区別される。最も早い段階で得られる皮は、まだ出生前の胎児のものである。出産間際の母ヒツジを屠殺し、そこから胎児を取り出して売る。これはドウパオ（肚剝）といつて、解放以前までは頻繁に行われていたが現在では禁止されている。ドウパオは飼料が不足した時などの応急措置でもあるが、実際は多くの収益をあげようとする農民たちの戦略でもあった。胎児の皮はドウパオピ（肚剝皮）と呼ばれ、自然に分娩させた場合より、上質の皮として評価され高値がつく可能性が高いと考えられている。しかし、これを獲得するため

には、流産、死産時以外は母胎もろとも屠殺せねばならず、飼育頭数の少ない家ではこの方法は困難である。現在、羅家角村、木橋村では、このドウパオによる皮の生産はまったく行われていない。



写真5 シャオフーヤン（子ヒツジ）の売買

閉じこめられたヒツジたち



写真6 売られる生後間もないシャオフーヤン

一〇八

今の主流の子売りは、生後三日以内の子ヒツジであるシャオフーヤン（小湖羊）をもつて行われる。それから得られた皮はシャオフーヤン皮（小湖羊皮、湖羊の子の皮）と呼ばれ、光沢、紋様に富み、ドウパオ皮と同じく婦人服や帽子、襟・袖・肩回りなど服飾品の部分素材として用いられる。その紋様などによって値段に幅があるが、一九九二年時点のおおむね一五〜四〇元で取引されている。生まれた子ヒツジをシャオフーヤン皮として利用する場合、生後三日以内に売ってしまうが、それまでの間シャオフーヤンの段階では母ヒツジから授乳させない。乳を与えると紋様が粗雑になり、値段が下がるという。

この地方では、「紅焼羊肉」などヒツジを用いた料理が多く伝えられている。杭州や、湖州などの都市部でも、寒い季節にヒツジ肉を



写真7 シャオフーヤンピ（湖羊の子ヒツジの皮）の乾燥

食べることが好まれ、そのため冬場には需要が高まるとともに、高値で取引されるようになる。子ヒツジのシャオフーヤンはヒツジ肉のなかで肉質が最もよいとされ、一九九一年の冬場には、一キログラムあたり約一〇元（シャオフーヤンは歩留約五〇パーセントなので一頭一・五キログラムの肉が取れる）と高値で取引されていたという。この肉は皮に劣らず重要で、皮と合わせてシャオフーヤン一頭で二五〓五五元もの収益を得ることになる。このように冬場には、丸ごと一頭売って、皮＋肉の市価を受け取るが、需要が落ちて肉が安い夏場などは、皮革生産者に屠殺してもらった後、皮の代金のみ貰い受け、肉は自家で消費することが多い。

生後三日を過ぎて六〇日齢までの子ヒツジを屠殺して取った皮は、パオコウピ（袍羔皮、

コートになる子ヒツジの皮」と呼ばれ、毛が柔らかで毛皮コートのよい素材となる。しかし、この時期の子ヒツジの取引価格は、一〇〜二五元とシャオフーヤンビに比べ安い。パオコウビにするヒツジは、大概シャオフーヤンの時に売り損ねたものが多い。

六〇日齡以降の湖羊の皮は、ラオヤンピ（老羊皮、年老いたヒツジの皮）と称され、鞆などの革製品に使用され、一頭あたり一五〜二〇元で売買される。しかし、飼育日数に応じた飼料量、手間を考えると、このラオヤンピの生産コストは大きく、これを本来の目的として生産することはほとんどない。成メスや種オスの老廃ヒツジの処分時に、肉とともに副産物として得られるものであると考えた方がよい。

さて、このような子売り以外に、嘉湖地方では湖羊の造肥能力が大いに期待され、それが飼育目的の一つとなっている。ブタの糞尿をもとした肥料は田の肥料として、ヒツジの糞尿はクワ畑の肥料として伝統的に重視されてきた。糞尿の排泄量は採食量、飲水量、季節によって異なるが、一日一頭あたりおおよそ三〜五キログラムと考えられている。さらにこれに敷き藁分の重さが加わるから、年間にすると相当なものになる。長期間かけてできるだけ多くの糞尿をしみこませた敷き藁がよい肥料となるが、これは逆にヤンバン内の湿度をあげることになり、湖羊にとっては不都合であるので、一〇〜一五日ほどで敷き藁を取り替える。

この地方の舍飼という飼育形態は、肥料を効率よく集めることと適合している。狭い空間に糞尿が溜まる仕組みになっているわけだから、それを集積することは至って容易である。造肥という飼育目的は、養蚕を積極的に行いクワ畑を多く使用するものにとっては、より重要になっている。クワ畑を多く維持するためには多くの肥料が必要であり、また多くのクワ畑を使用すれば余剰のクワの葉で多くの湖羊を飼育できる。先に、獲得できる飼料資源量と労働

量が、各家の湖羊の飼育頭数がある程度規定していると述べたが、さらに養蚕との関わりの深さが、全体の飼育頭数に影響を与えている。農耕卓越地域において展開されるヒツジ飼育は、まさに農耕と密接に結合され、「目に見えない形」で人々の生活に寄与してきたのである。

一方、成ヒツジの肉は、子ヒツジを売却するのと同じく「目に見える形」で人々に収益をもたらしている。ただし、ラオヤンピと同じく、それを目的として生産することはほとんどない。シャオフーヤン生産に使えなくなった成メスや種オスの処分時の副産物であり、その収益は、あくまで子ヒツジ生産に付随するものといえる。

肉は冬場に需要が増え値段も上がるので、成ヒツジを処分するのはその時期にできるだけ合わせる。逆に、夏場には安くしても買い手がつかないほど消費が落ちるという。皮革生産者が直接さばくシャオフーヤンを除いて、ヒツジの売買は、ヤンハン（羊行）というヒツジ市場で行われ、年齢を確認し、体重を測定して値がつけられる。生後数カ月（一五カ月以内のものは一キログラムあたり約三・六元、一五カ月以上経つと約三・三・二元と徐々に単価を下げていく。さらに生後数年経ったものは、肉質が落ちているものと見なされて、重さで売るのはなく話し合いで一頭いくらと決め、安値で売買される。

湖羊の体重は、生後六カ月には三〇キログラムほどになり、それから五〇パーセントの歩留があるとして、冬場なら肉だけで五四元ほどの収益をあげることができる。これに皮（ラオヤンピ）を加えると、七〇〜七五元ほどの収益となり、シャオフーヤンの収益二五〜五五元よりかなり増収となる。しかし、先にも述べたとおりこの地域において飼育空間、飼料資源量と労働力は限定的であり、半年間も単なる肥育目的に飼育するのは困難であると考えられている。⁽³⁾ シャオフーヤンという子ヒツジを中心に生産し、売買するという特異的な飼育目的も、特異的な飼育形態と同

じく、この地の社会環境、自然環境に適合したものといえる。さらに、それが商業経済を基盤としてのみ成立するヒツジ飼育であることを見逃してはならない。売買を前提とすることなしに、湖羊を飼育することは収益の面からいってできないのである。

四 特異的なヒツジの繁殖形態——オスの早期更新——

湖羊の飼育頭数は飼料資源量と労働力に応じて各家ごとに異なることは既に述べたが、一戸のオス・メスの構成にはある程度規則性を見いだすことができる。成オスは繁殖用の種オスで、おおむね一頭、時にはオスをまったく保有しない場合もあつてその数は限られている。一方、成メスはその家の飼育能力に応じて、一〜八頭飼育されている。また、ファツーヤン（花仔羊）と呼ばれる一歳以下の子ヒツジは、多くともオス一頭（種オス、あるいは種オス候補）、メス一頭（成メス、あるいは成メス候補）で、出産時に一瞬保有頭数が増えることはあつても、日常的な飼育状況において、飼育頭数の総合計が一〇頭を越えることはまずないといつてよい。たとえば、羅家角村LY家では一九九二年九月時点、種オス一頭、成メス六頭、種オス候補一頭の計八頭を、木橋村XB家では一九九六年六月時点、種オス一頭、成メス二頭、計三頭を飼育している。

このような湖羊のオス・メスの構成は、子売りという湖羊飼育の特異的な飼育目的によつてある程度規定される。ヒツジの経済的な価値は乳、毛、皮、肉、糞尿（牧畜社会では価値は低い）という五つの生産物を生み出すところにある。しかし、すべてのヒツジが五つの生産物を等しく生産できるわけではない。当然、性差があり、乳に関しては

メスのみがその生産を担う。したがって、食料として乳を重要視する牧畜社会において、経済的にオスの存在はメスに比べて低く見積もられる場合が多い。また、メスは出産というリプロダクションの機能を有することにより、保有頭数全体の増減に直接関わっており、その点からもメスは重要視される。もちろん、オスもリプロダクションに関するが、必要最小限の頭数で一定の保有頭数は維持できうる。むしろ過剰なオスの存在は、群れを安定させるという基本的な視点に立つと攪乱者として不都合でもある。こういう要因から、多くの遊牧、牧畜社会においてオス（未去勢）の絶対数はメスに比べて顕著に少なくコントロールされている⁽⁶⁾。

一方、湖羊は群れの安定性などに必要は本来的にないのであって、生後間もない屠殺は、それ自体主たる生産目的と結びついているのである。それは、何よりもオスに限らずメスも同様に屠殺することからも明らかである。

ここには牧畜社会にみられるような、ハーディングと結びついたオス子ヒツジの選択的大量屠殺はなく、最初から目的化された非選択的屠殺が存在するだけである。しかし、先にも述べたように一戸の飼育頭数中オスはメスに比べて少ない。それは極端にいつて、「目に見える形」の収益をもたらす子ヒツジの生産の多寡に関して、オスは直接影響力をもっていないということである。したがって、オスではできるだけ少ない方がよく、最多でも種オス一頭と種オス候補一頭で間に合うのである。かたや成メスの場合、たいていの人々は子をたくさん取って売りたいと思っているから、できるだけ増やそうとするが、この地域における飼育状況の限界性（飼育面積、飼料資源量、労働量）によって自ずと各家で可能な最大値で制限されている。

ただし、この飼育頭数の安定性とは裏腹に、一戸のヒツジのユニットを構成するヒツジたちは当然毎年少しずつ入れ替わる。そして、その入れ替わり方はオスとメスとはまったく違う形態をとっている。

まずオスであるが、通常、湖羊のオスは生後四〜五カ月ほどで性成熟するといわれ、実際には六カ月齢とかなり早くから種つけに使われる。種オスは一一月前後に生まれたオス子ヒツジの内、体が大きく毛並み（毛の模様）がよいものを一頭のみ選抜する。種つけを開始すると、ケーテーヤン（？胎羊、種つけできるヒツジ）と呼ばれ、およそ半年から八カ月間使われた後、売却・屠殺される。なかには半年程度種オスとして利用し、見切りをつけたらすぐに去勢して、栄養分の高い精飼料によつて、急速に肥育させ売却する人もいるという。いずれにせよ、種オスは、生後約一二〜一五カ月という異常に早い段階で更新されるのである。なぜこのような早期更新を行うかといえば、それは飼料消費量と、売却する時の肉の値段とを湖羊飼育者が勘案しているからである。

消費する飼料量は若年のオスより成オスが多く、さらに長期飼育するほど飼料消費の累積量はかさんでいくのであるから、飼料コストの方面から早期更新は望ましいといえる。また、売却時の体重一キログラムあたりの肉単価は、先にも述べたように若いものほど高く、シャオフーヤンで売る時以外は、生後一五カ月ぐらいまである程度の値段で売れるが、それ以降は値が落ちてくる。一方、オスの体重は生後六カ月ぐらいまで急速に増加し、一年ほどでほぼ三〇〜四〇キログラムになり、それ以降はその増加は緩慢になる。つまり売却する時の収益を考えると、満一歳前後で売ってしまった方がよいことになる。

さらに、単に一年で更新するということではなく、その更新する時期をヒツジ肉の需要の多い冬場に設定することにより、相対的に多くの収益を得ることができ、この地の人々は知っている。嘉湖地方には、「十月里留羊大如母（あるいは娘）（一〇月に留めおいたヒツジは、すぐに母のようになる）」ということわざがあるが、これは農曆一〇月（太陽暦一一月前後）に生まれたものは成長がよく、親ヒツジとして選抜すべきであることを奨励している。

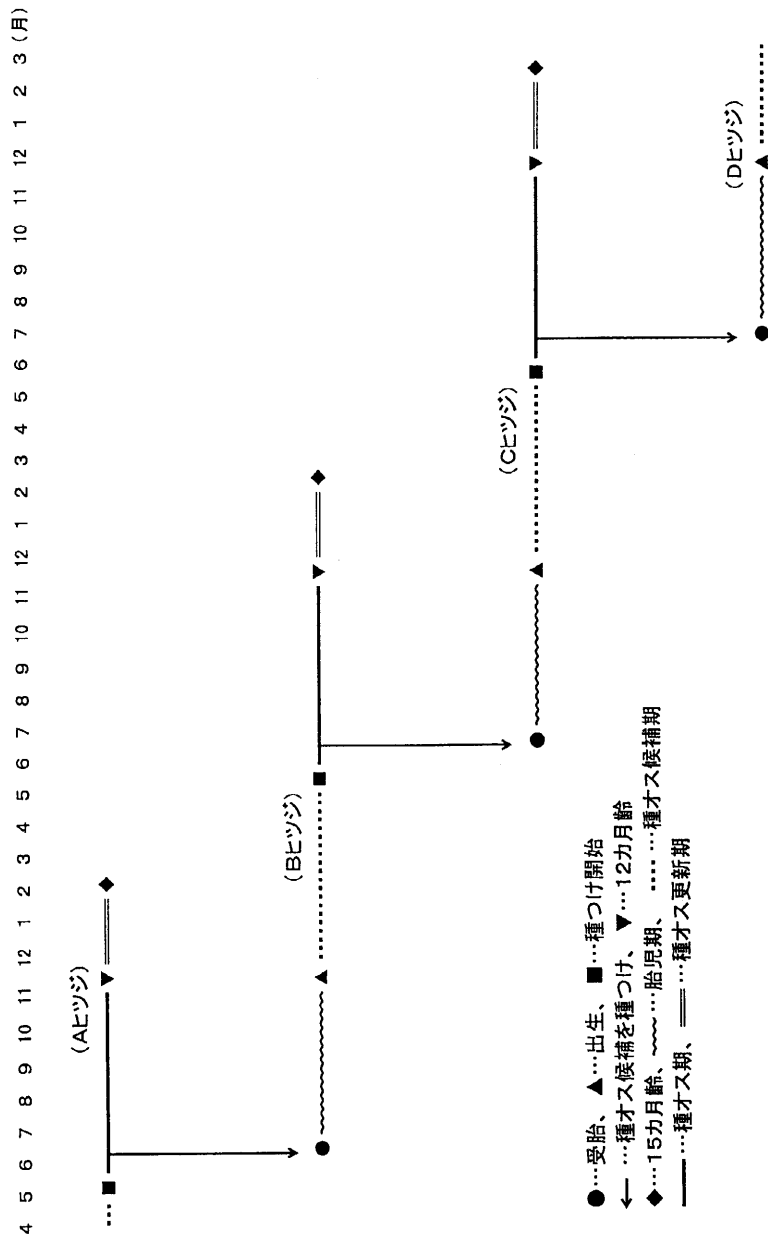


図1 種オスヒツジ更新の理想的パターン

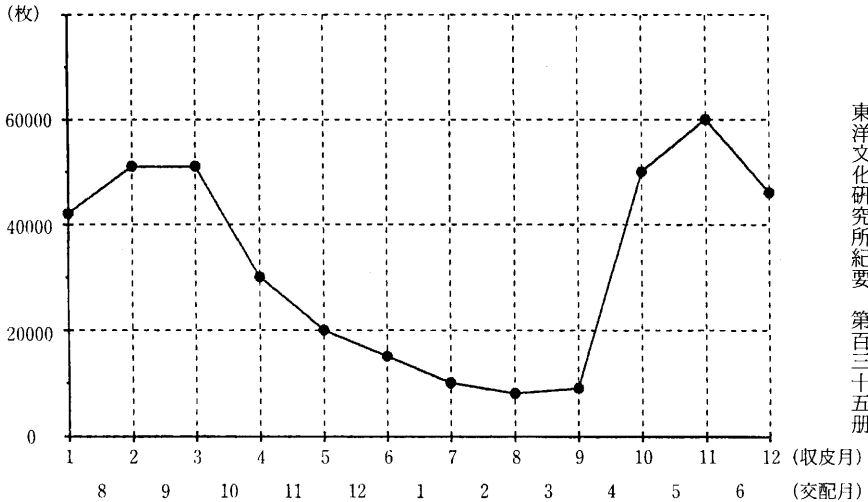


図2 一九五七年嘉湖地区のシャオフーヤンピ集荷数 (蔣・何 1985: 46より作成)

このことわざは、母のように大きく壮健になってよい繁殖用ヒツジになるといった意味とともに、その更新時期の妥当性も示している。つまり、一一月前後に生まれたオスは、一歳になってその役割を終える頃には、ちょうど肉の値段が高くなる時期にあたり、売却してより多くの収益をもたらすことができるのである。実際には、育成中に種オス候補として不適格なものも出て、各家における種オスの存在状況、更新時期はずれると思われるが、人々の理想とするオスの更新は、一一月前後の秋から冬にかけて毎年行われるのである。

図1は、人々が基本的に認識している湖羊の更新を模式化したものであり、三年間の種ヒツジが交替していく理念的なパターンを抽出したものである。このような理念的なオスの更新にしたがえば三、四月を除く大半の時期に種つけ可能である。逆にいえば、この三、四月に種つけ数が減るということとは、当然、その時に種つけた子ヒツジが生まれる八、九月の産子数が減少することになる。図2は、嘉興地区における一九五七年のシャオフーヤンピの月別集荷数グラフ

であるが、シャオフーヤンピは生後三日以内に屠殺された子ヒツジの皮であることから、その数は産子数を少なからず反映している。このグラフからわかるように夏場七、八、九月の皮の集荷数はかなり少なくなっており、まさに湖羊生産の端境期である。この端境期は、ヒツジ肉の安値期に一致するので、生産しても多くの収益は望めないのはもちろんである。また、一〇、十一月には急激に増加している。これは、その時期にヒツジの肉が高くなり、人々がシャオフーヤンの皮ばかりでなく肉も高く売ろうとした結果であり、かつ種オスを積極的に確保しようとした結果であると考えられる。人々の考える理念的な種オスの早期更新は、現実には具現化されているのである。

この地方にはまた、「猪過期死勿及、羊過期大勿及（ブタは死んでからでは間に合わない、ヒツジは大きくなってからでは間に合わない）」ということわざもある。これは、ブタは死んでは売れず、ヒツジは大きくなつては売れない、したがって、ブタは死ぬ前に処分し、ヒツジは大きく成長する前に処分すべきだという意味である。このことわざは、売買を前提とした湖羊飼育におけるオス早期更新の重要性を端的にいい表している。

さて、次にメスであるが、メスはオスとは対照的にすぐには処分せず、特に産子数の多いメスは積極的に長く飼育する。牧畜社会において、家畜は元金のごとく扱われ、生産される乳を利子として利用することにより持続的な生活を営むが、この地域では生産される子供自体を利子として利用するのであって、それを直接生み出すメスは貴重な元金なのである。そのため基本的に、飼育頭数に応じて更新の年月が決まってくる。年を取ると産子数が減少するので、毎年、年取ったものから順に一頭ずつ、新しいメスと更新していく。したがって、成メスを六頭飼う家では基本的に六年で更新、三頭しか飼育しない家では三年で更新するのである。オスと同じく、一ヶ月前後生まれの子ヒツジがよい成メスになると考えられているが、その更新はオスに比べて長い時間のなかで判断され、その時々飼育状況に依

じて行われる。メスは売られる時には丸ごと一頭の値段で売られる。生後数年も経っており、肉の値段も安く経済的な価値が低いためである。ただ、生後一年前後になってもなかなか妊娠せず、成メスとして不適格と判断されたものを、オス同様に去勢し肥育して早期に売却することもあるという。

湖羊のメスは、通年繁殖可能である。子売りという飼育目的上、母子間は二〜三日以内、授乳もせぬ内に分離され、成メスはすぐに発情する。したがって、無理すれば一年間に二回の出産が可能であり、通常では二年間で三回出産させるという。メスはオス同様早熟で、生後四〜五カ月で性成熟し、約一七日周期で二日間ほど発情する。そのため、おおよそ六カ月齢頃までには、最初の妊娠をし、それから一四五〜一五〇日後に出産する。湖羊の親ヒツジ選抜は、系譜的なものではなく各個体の一回性の特徴を意識して行われる。種オスの選抜に関しては、その体軀や毛並みに注目して行うが、メスの選抜には、産子数が重要なファクターとなっており、出産一回ごとの産子数の多いものに注目している。誰しも子ヒツジを多く生産したいという欲求があるわけで、売れる子ヒツジの数が増えるように産子数の多い成メスを作りたいと考えているのである。現在の湖羊は双子、三つ子などの多胎性が顕著で、三つ子で生まれたメス子ヒツジは、成長してからいたい三つ子を連続して産むとされる。しかし、実際にはそうやって残した成メスが、一回の出産に一頭しか生まないようなことがあり、そういう状態が続くようだと、その成メスはまだ若くとも年長ヒツジに先立つて処分される。⁽⁷⁾

五 湖羊誕生の契機

A D 六世紀の『齊民要術』には、子ヒツジを確保する時期、繁殖・去勢の心得、ヒツジ飼いの適性、放牧の秘訣、ヒツジ小屋の建て方と管理方法、給餌法、搾乳法、チーズ・毛など生成物の加工法、病気の治療法など、ヒツジの飼育・利用技術が細かく記載されている。しかし、このような冷涼乾燥牧畜型の飼育技術は、湖羊の存在する江南地域においては応用が困難であり、当然、独自の飼育技術を発展させる必要があった。

湖羊の成立にあたって、その改良の基礎とされた品種については、現在の蒙古羊系統のヒツジ移入に注目する説(森一九七〇・二八七、李群 一九八七・三八六―三九一)と、ヒツジの分布する地理的観点や、形質的な近接性から、河北省や河南省に分布する小尾寒羊という品種との近縁関係に注目する説(李志農 一九九三・五五)、蒙古羊系と寒羊系がともに移入されたとする説(蔣・何 一九八五・三)とに大きく分かれる。また、湖羊の成立年代については、一二世紀以降の南宋の成立以降とする説が有力視されている(鄒 一九八六・一七一、李群 一九八七・三八六―三九一、李志農 一九九三・五五)。これは「北羊南移」と呼ばれており、一二世紀初頭、北方系の金の南下に圧迫された北宋が南にわたって南宋を建国し、大量の黄河流域住民が遷都した臨安(現浙江省省都杭州)など江南地域へ移り住み、その際、大量のヒツジを携えてきたとするものである⁽⁸⁾。

一方、安志雲、李有龍などは『十国春秋』を読み解くなかから、五代十国期にヒツジの江南地方への移入が始まり、北宋期にもさらに幾度となく来入が継続され、それが湖羊の基礎となったという反論を提示している(安・李 一九

九五・一〇二—一〇三。

確かに、江南地方においてヒツジの存在は南宋以前も否定できない。しかし、湖羊の成立過程を考察するにあたっては、それが現在の湖羊の直接的な基礎となったかどうかを検討すべきであろう。

宋の高宗が臨安に遷都して一九年後の一四九年、江南に居住していたものと思われる陳勇は『農書（陳勇農書）』を著した。これは当地の江南農業の実態を反映したものとして興味深いが、その糞田之宜篇第七には「赤緹者糞宜用羊」と『周礼』の一節を引いて施肥への羊糞の効用を述べている。また、桑園保護に関して「以棘刺絆縛遶護、免牛羊挨拶損動也（棘のある植物などを縛りつけてまわりを保護し、ウシやヒツジが近づいて食損したり動かしたりするのを防ぐ）」と述べられていて、当時「羊」がこの地に存在した可能性は高い。しかし、この「羊」がヒツジを指すのかヤギを指すのか明確ではない。もし、これをヒツジとした場合、その飼育法は少なくとも桑園に被害をもたすような放し飼いであったということであり、先に述べたような現在の湖羊の飼育形態——完全舎飼い——とは明らかに異なるのであり、この記述をもって湖羊の成立とするわけにはいかない。

一方、『陳勇農書』に遅れることおよそ五〇年、嘉泰元年（一二〇一）に談鑰によって編纂された嘉泰『吳興志』巻二〇、物産には、「舊編云安吉長興接近江東多畜白羊按本草以青色為勝次烏羊今鄉土間有無角斑黑而高大者曰胡羊」とある。この「舊編⁹⁾云」う「白羊」はヤギと考えられるとしても、「胡羊」は現在の湖羊に連なるものと比定されている（李群 一九八七・三八七）。そして、「今郷土間」の文字にしたがうならば、湖州一帯に「胡羊」がもたらされて未だ日が浅く、この頃をもって湖羊の基礎となったヒツジ到来の根拠となりうる。ただし、「胡羊」の特徴としてあげられる無角、黒斑、大きな体型という諸特徴の内、黒斑については現在の湖羊の品種的な特徴と性格を異にしており、

この時期に現在の湖羊が完成されたとは見なしがたい側面もある。⁽¹⁰⁾あくまで湖羊誕生の契機ととらえるべきであろう。下って、元代における江南のヒツジについての記述はいかなるものか。

遅くとも至元一〇年（一二七三）には編まれていたと思われる官撰農書『農桑輯要』のヒツジに関する記述は、『齊民要術』などの乾燥地域に適合した北方的な管理技術、知識体系に大きく依拠している。当然、湖羊と連なる温暖湿润適合型の品種、および飼育技術に関する記載はない。『農桑輯要』はまた、時代を近くする『陳旉農書』を典拠とすることがほとんどないが、これは江南の農耕技術が、元の北方的な領域では運用できなかったため、そして、『農桑輯要』編纂時に江南の湿润な農耕地帯を完全にその領内に組み入れていなかったため（石 一九八〇・八九）、その点において湖羊に連なるヒツジに関する記事が登場しないのもつともであろう。湖羊の飼育技術の特殊性―南方的、農耕社会的、非牧畜的飼育法―がそこに反映しているとも考えられるのである。

また、同じく元代の一四世紀初頭に出された『王禎農書』では、江南の湿润地域における農耕技術にも目を向けているが、そのヒツジ飼育技術に関する記述は卷五、農桑通訣五、蓄養篇に僅かにあるのみで、やはり『齊民要術』の域を出ない。また、地方誌では至元二五年（一二八八）上梓の至元『嘉禾志』卷六、物産に獣之品として「羊」の名が見えるのみで、その詳細は不明である。

明代に入ると、農書では一六世紀初頭の『便民図纂』に「養羊法」、「棧羊法」としてヒツジ飼育がふれられている。『養羊法』では、ヒツジは「火畜」であって湿気を嫌い、高燥な建物を用いて棚を作り、常に糞などの汚れを除くように指導し、子取りの時期を臘月（十二月）と一月が最適で、これに十一月、二月が次ぐとしている。これは、明らかに『齊民要術』の影響である。しかし、「棧羊法」では、九月初頭に「羯羊（去勢ヒツジ）」を数十から百頭ばかり飼

い始め、当初五〜七日間は細切り干し草を水に混ぜて与え、その後潰した黒豆を少しずつ加えるなど、給餌法、給水法、畜舎の衛生管理について舎飼いな技術にのみふれている点は興味深い。『齊民要術』ではマメを与えるなど同様のフィーディングの技術とともに、グレージング（放牧）に関する技術も重視しており、いわゆる放牧と舎飼いの季節的交替管理を推奨しているが、『便民図纂』では放牧に関する記述は非常に希薄になっているのである。単に放牧管理技術について省略したか、それとも意図的に舎飼い技術だけを強調したのか、同書を読む限りにおいて断定できないが、同書をもってヒツジ飼育を実践する場合、放牧を行うためにはいささか物足りないことは否めない。ただし、舎飼いとはいっても、その飼育規模、形式において『便民図纂』に書かれている技術と、現在の湖羊の飼育技術とは大きく異なるため、同書の状況が湖羊に連なる状況なのか判然としないが、同書が太湖地方の農民向けの一種の通書であったこと（石 一九八〇・一〇五）を考えると、その状況が湖羊と関係をもつ可能性は必ずしも否定できない。

一六世紀末に李時珍によって著された『本草綱目』巻五〇、獸部、羊には、「胡羊」の文字が再び登場する。しかし、「胡羊」の説明には、「大食国出胡羊高三尺餘其尾如扇每歲春月割取脂（大食国より出した胡羊は高三尺あまりで、尾が扇のようになっていて、毎年春にこれを割り脂を取る）」とあり、脂肪尾の利用が明記されているが、この点は現在の湖羊の品種特性とは大きく異なる⁽¹⁾。ここでは、後で述べるようにむしろ「生江南者爲吳羊頭身相等而毛短」とある「吳羊」に湖羊との関係性を見いだすべきであろう。

萬曆二十四年（一五九六）の萬曆『秀水縣志』食貨志、物産、毛之品には、「羊」の文字が見えるのみで詳しい説明はない。しかし、同書の食貨志、貢課には「羊皮七十二張」と記載されており、貢品歳進に「羊」の皮が用いられていたことがわかる。この「羊」がヒツジであるのかヤギであるのか、書面のみでは判然としないが、現今の皮利用から

判断してヒツジの皮と考えて差し支えなからう。

さらに、萬曆二八年（一六〇〇）刊の萬曆『嘉興府志』卷八、貢品には、嘉興府からの貢進する物として、「獐鹿麂羊等皮一千五百張」とあり、キバノロ（獐）、シカ（鹿）、キョン（麂）などとともに「羊」の名がやはり登場する。縣ごとに細かくみると、嘉興縣「獐鹿麂羊等皮七百張」、秀水縣「羊皮七十二張」、嘉善縣「羊皮五十五張」、平湖縣「獐鹿麂羊等皮一百二十一張」、崇德縣「獐羊二皮共二百七張」、桐鄉縣「獐羊皮共一百八十七張」とあり、一六世紀末には嘉興地帯の産物として「羊」の皮が定着していた。

既に述べたように、現在の湖羊は皮利用という側面において特徴を有しており、その特徴故に独特の飼育、繁殖形態をとる。中国の他地域にみられるヒツジ利用と、大きく異なるこの湖羊の特徴が、この明代には成立していた可能性がある。ちなみに、萬曆『秀水縣志』食貨志、戸口によると、秀水縣には「熟皮匠二十九戸」が存在したことが記されている。「熟皮匠」とは皮なめしの職人のことであり、このような職能者がヒツジの皮革生産にも携わっていた可能性⁽¹²⁾がある。

六 湖羊の完成

さて、ちょうどこの一六世紀から一七世紀に移りいく時代に生きた人物として、嘉興府の隣り松江府（現上海市）出身の徐光啓を見逃せない。彼の業績はその後、明代随一の農書『農政全書』として世に出されることとなる。自身の実験に基づいた科学性、体系性が高く評価されている同書において、徐はヒツジ飼育に関して『齊民要術』、『便民

図纂』などの見解を再録するとともに、玄扈先生の名で、やはり自身の見解を付け加えている。それによると、ヒツジ小屋を魚塘（養魚池）の脇に建て、毎日草と糞を掃除し、魚塘に投げ入れると草は草魚の、糞は鯉魚の餌となり「一挙三得」になると説明されている。ヒツジの糞をもつて、魚類を育てるという方式の記事は、明末には確立すると思われる農桑牧魚結合という、江南の地に特徴的な集約的農業経営についての初見であり、現在まで連綿と受け継がれている生業形態の萌芽を探るうえで重要な意味をもっている。そして、そのインテグレーション（結合）のなかに、ヒツジが配置されるのはまさに現在の湖羊の状況と同じであり、この頃には湖羊の特徴がある程度確立されたと考えられる。それは、同じく一七世紀初頭、明末に出された『沈氏農書』、そして清代初頭の農学者、張履祥がそれを補訂し、自分の意見、経験を付加した『補農書』に、より鮮明にあらわれている。

『沈氏農書』には、太湖周辺の農業経営のあり方が小地主の立場から精緻に描かれている。湖州の小地主である沈は、労働力・資本・資源の有効な活用を目指して、経済という観点から各種生業の生業結合を模索した。そして、その生業結合のなかに、ブタ飼育とともにヒツジ飼育を見事に組み込んでいるのである。

沈は、ヒツジを飼って得られる収益と、その飼育に要するコストを勘案し、その有用性を述べている。特に、その肥料の作出能力に注目している。同書巻上、運田地法、一二條では、自家でブタ、ヒツジ飼育をすることが、肥料を得るために最も簡単で、重要なことだとし、「古人云租田不養猪秀才不讀書必無成功則養猪羊乃作家第一著（古人いわく、田畑を作るのにブタを養わないのは、秀才が本を読まないのと同じく、必ずや成功しない。すなわち、ブタ、ヒツジの飼育は農家の第一に重要なことである）」と述べている。⁽¹³⁾さらに、ヒツジの一年間の飼料コスト（当時は、もっぱら枯れたクワの葉、干し草を利用）を、羊毛と子ヒツジの販売収益で賄うサイクルのなかで、肥料という余剰産物が

安定して得られることを利点としてあげる⁽¹⁴⁾。

巻上、蚕務六畜附、五條では、そのヒツジは「胡羊」と特定され、その特徴的な飼育におけるコストと利潤について詳細に検討されている。その内容を若干説明しよう。

巻上、蚕務六畜附、五條

「一、うまく子を孕ませるには、一雄十雌（二頭のオス、一〇頭のメス）の比率で一一頭飼育するのがよい。これよりオスが少ないとメスが孕むことなく、また多いと群れが乱れる。「胡羊」は毎日正しく、一日も欠かさず給餌するところが肝要で、冬場飢えたものは夏に死に、夏場飢えたものは冬に必ず死ぬという。上記のように一一頭飼ったとして毎日四〇斤（当時の衡一斤＝一・一九五斤（現在の市斤）で換算すると約二四キログラム）の木の葉（クワの葉と思われる）と草を食べる。年間では一万五千斤（約八・九トン）あまりかかる。この内自家生産したクワの葉（これは子ヒツジの飼料とする）を除くと、「枯葉（枯れたクワの葉）」を七千斤（約四トン）さらに購入しなければならない。これは農曆六月に長安鎮の人がやって来た時に、あらかじめ価格は一千斤あたり三錢銀以上で予約しておき、冬季に行って運んでくる。七千斤だと合わせて約銀三兩を費やすことになる。ヒツジ用の草七千斤は、農曆七月に崇徳や桐郷で買う。泥などを除いて一千斤あたり約四錢、七千斤だと約三兩になる。「塾柴（小屋の敷き藁）」四千斤は約銀二兩で、これと枯れたクワの葉、草の代金を合わせて約銀八兩を費やすことになる。毎年、羊毛が三〇斤以上生産でき、これは約銀二兩になる。また、子ヒツジは一〇頭あまり生産でき、これは約銀四兩になる。したがって、両者合わせて、枯れたクワの葉、草のコストを賄える。さらに、毎年肥料が三〇〇担（約一八トン）得ることができ、もしヒツ

ジ小屋の敷き藁が多ければ、三〇〇担を超す生産をあげることができる。」

この文章から、湖羊の湖羊たる特徴が当時形成されていたことがわかる。現在行われているヒツジの舎飼い、完全なブリーディングという特異的な飼育形態、商品としての子売り、肥料生産という特異な飼育目的はこの時期既に完成されていたのである。また、養蚕の余剰クワの藁をヒツジの飼料とし、排泄された糞を肥料とするという桑牧結合もほぼ固まっているとみてよからう。さらにここで注目せねばならないのは、湖羊の生産が今以上に商業経済に強く依存していることである。現在は、飼料の獲得はほぼ自家で獲得できる量に限定されており、それが飼育頭数の限定要因となっているのであるが、この文章をみると、飼料や敷き草を購入してまで賄う方法を採用している。現在の湖羊飼育を低コストの制約下、高生産を目指す戦略とするならば、『沈氏農書』に描かれた湖羊飼育は、高コストを覚悟のうえで、高生産をさらに拡大させる戦略といえるであろう。当時の飼育法は商業経済への依存は高いのであり、商業経済によって成立する流通をうまく利用することによって、村や近在という狭い範囲に限らず、さらに外側の広い地域から生産に必要な資源を移入することが可能となっているのである。『沈氏農書』が農書であり、理想とする農業像を描いたもので、現実の様相を必ずしも直接反映するものではないことを勘案しても、湖羊飼育が商業経済とともに歩み発展してきたことは否定できまい。

『沈氏農書』を補訂した張履祥は、本稿二、四章で対象とした桐郷地方の出身でもあり、農業経営に湖羊飼育の占める重要な役割について見逃すことはなかった。彼は、その著書『補農書』巻下、附録、策鄔氏生業において、主人が死んで、年老いた母や婦女子しかない、鄔家のあるべき生業戦略について卓見を示している。その家は限られた瘦せ田と、限られた労働力しかもたず生産がおぼつかない。人を雇うにもその費用が捻出できない。こういった状況で、

「不種稻者爲其力省耳（イネを植えないことは、労力を節約するのみ）」として、水田をクワ畑、マメ類の畑、竹林、果樹園、養魚池にして、そこからの産品をコメに換えることを推奨している。そして、「畜羊五六以爲樹桑之本穉羊亦可易米（ヒツジを五、六頭養つて、クワの肥料とする。子ヒツジはコメに換えることができる）」として、そのような生業形態のなかにヒツジの飼育を組み込み、さらなる生産性をあげることを奨めているのである。この生業戦略は、一般的に生業の中心と考えられてきた稲作を制限し、商品作物に新しい活路を見いだしたもので、当時の小農経営における商業経済への対応と受け止められよう。明末清初において、商業経済と分かちがたい農業が発展し、そのなかに湖羊飼育も取り込まれ、それに対応した発展を遂げたのである。

さて、このような明末清初の農書は、湖羊の歴史的背景を最も雄弁に語ってくれるが、以降、湖羊およびそれを取り巻く経済については、地方誌などに断片的に記されるのみである。崇禎十一年（一六三八）刻本の崇禎『烏程縣志』卷三、均平では祭祀にヒツジが用いられることが書かれている。しかし、それが湖羊であるかは不明である。また、同書卷四、土産、獸類には「烏鎮有水晶羊」とあり、湖羊とは異なつた呼称のヒツジが登場する。約百年後の乾隆一〇年（一七四五）刻本乾隆『平湖縣志』には、卷二、土産に「羊」の文字がみられるだけであるが、翌年刊の乾隆『烏程縣志』卷一三、土産では、『烏程文獻』を引いて「水晶羊肉烏程乳羊作脯四方聞名（水晶羊肉は烏程の生まれて間もないヒツジで作つた干し肉で、その名は四方に聞こえている）」とあって、前述の「水晶羊」が子ヒツジによつて作つた食品であることがわかる。湖羊生産の主流であるシャオフーヤンが皮ばかりでなく、肉も賞味されることは先に述べたが、それが特産として有名になっているのである。商品としての湖羊は、加工されることによってさらに新たな商品として流通し、その販路が日増しに広がつていったことが推察される。

乾隆『烏程縣志』卷一三、物産、獸では、「羊」としてヤギ以外に「呉羊」があげられる。これは「卷尾無角」で、干したクワの葉を食べさせて育てるので「桑葉羊」といわれると『湖録』の見解を引いて述べられている。その特徴からいって、このヒツジは湖羊であると考えてよさそうである。先に筆者は『本草綱目』において、「胡羊」ではなく「呉羊」を現在の湖羊に連なるものとして比定したが、その蓋然性は高いといえよう。

一九世紀末、同治一三年（一八七四）刊の同治『湖州府志』卷三三、輿地畧、物産下、獸之属では、乾隆『烏程縣志』同様『湖録』を引いて「桑葉羊」の名が再び登場する。ちょうどこの頃編纂された『広蠶桑説輯補』培養桑樹法、初桑二桑説一條にも、クワの葉をもつてヒツジを肥育することが書かれており、ヒツジ飼育におけるクワの葉利用という桑牧結合の方法が、かなり一般的に江南の人々に普及していたことが推測される。さらに「桑葉羊」について同治『湖州府志』卷三三、輿地畧、物産下、獸之属では、「北人珍焉其羔兒皮均可爲裘」と続けており、この時点で現在と同じく子ヒツジの皮を毛皮の衣類に用い、それが流通していた事実が確認できる。

一六世紀末に行われていた「羊」の皮の貢品歳進は、この一九世紀末にも行われている。光緒五年（一八七九）刊光緒『石門縣志』卷三、食貨志、田賦、貢品には「皮作局」の貢品として「麋鹿麂羊皮貳百柒張」とある。さらに同戸口には「熟皮匠一」とあって、皮なめし職人の存在も確認できる。また同書卷三、食貨志、物産、毛類には「羊」として「山羊綿羊胡羊烏羊」と、「胡羊」以外のヒツジが記されているが、詳細は不明である。同年刊光緒『嘉興府志』には、『沈氏農書』が転載されるのみで目新しい内容はない。光緒一三年（一八八七）刊光緒『桐鄉縣志』卷七、食貨志、物産では、羊毛を使用した布の製造が確認できる。現在、羊毛はほとんど利用されていないが、費孝通の指摘によれば、一九三〇年代までは自家用に使用していたようである（費 一九八五・二一四）。

光緒一二年（一八八六）刊光緒『平湖縣志』卷七、食貨下、物産、獸属には「胡羊畜者少」、光緒一八年（一八九二）刊光緒『嘉善縣志』にも「本地：胡羊爲少」と、湖羊飼育が盛んでない旨述べられている。しかし、これらの地域は嘉湖地方の西の端にあたり、湖羊飼育の中心が、現在の湖州市と嘉興市の境界付近にあることから理解できる。

以上の一九世紀末の史料を読み解く限り、この時期には湖羊飼育に関してこれといった画期的な展開は起こらなかったように見受けられる。それでは、そのまま現代へと湖羊飼育が淡々と継承されるのかといえば、そうではない。実はこの一九世紀末から二〇世紀初頭にかけては、湖羊がよりマクロな商業経済に取り込まれる時代だったのである。一九世紀末から二〇世紀初頭の清朝末期に、この嘉湖地方の隣りの上海が中国有数の貿易港として発展する。上海はこの時期に全国の外国貿易総額の五割前後を占め続け、全国の大都市との商品取引も拡大された。一九世紀末の外国貿易の輸出品としては生糸と茶が圧倒的な量を誇っていたが、実は各種原料とともに皮革類がそれらに次いで輸出されていたのである（高橋・古厩 一九九五：六五）。その皮革類のなかに湖羊は、含まれることになり、伝統的輸出産品として世界にその名を轟かせるようになる（蔣・何 一九八五：九三）。

上海と近いばかりでなく、輸出の多くを占める生糸に関して嘉湖地方は全国有数の産地であり、そのような新しい経済状況は速やかにこの地へと影響を与えたのである。民国一二年（一九二三）修の民国『德清縣新志』卷二、輿地志、物産、綿羊には「即吳羊無角而尾大新市出產爲大宗銷於上海香港年約數萬頭」とあり、上海、香港において年間数万頭も売るために「吳羊」を飼育していることがわかる。さらに同、皮毛には、新市において各種獸類以外のヒツジの皮、羊毛を売買するために特別の「皮毛行（毛皮商店）」があり、石門鎮においては大量にヒツジの皮、および子ヒツジの皮を売り「出口（輸出）」の産品としているとある。この時期に明らかに湖羊の流通する世界は広まり、その

商業システムは、近隣の地方から国内へ、さらに海外へと枠組みが拡大されたといえよう。

七 結語 —— ヒツジに刻まれた歴史 ——

湖羊は舎飼いと完全なブリーディングという世界に稀な飼育形態をもつて飼育される。これは、使用できる土地空間が少なく、飼料となる草資源も限定的で、かつ飼育に直接従事する労働力も限られているという、この地の社会的条件、自然的条件によつて規定されたものである。また、子売りという飼育目的は、商業経済に見事に対応した利益獲得の方法である。それは、早くより商業経済、市場経済が成立し、農村部にまでその影響が強く及んでいたこの地の経済条件によつて規定されたものといえよう。さらに、オスの早期更新という繁殖形態も、商業経済に対応し、ヒツジ飼育を維持するためのコストを軽減させる役割をもつ。湖羊は他のヒツジがもたないような資質を身につけており、身につけたことによつて現在までもその命脈を保ち続けているといえよう。

湖羊の形成過程を歴史的状況のなかに眺むれば、それが農耕の高度集約化や商業化の過程と並行して進行してきたことが理解される。その歴史は、一二世紀中庸から一三世紀初頭の南宋代にまで遡れそうであるが、その時代はまた長江デルタが「江浙実らば天下の食たる」、「蘇湖熟すれば天下たる」といわれたように、全国でも比類なき穀倉地帯として発展を遂げる時代でもあった。そのような状況にあつて、本来、北の広大な大草原を走り回っていたヒツジたちは、狭隘な陋屋の暗闇のなかに閉じこめられてしまったのである。

宋代以降の江南地方の発展は、長江デルタの圩田、畝田開発などの工学的適応と、占城稻の移入と早稻、晚稻の品

種改良などの農学的適応によつて完成される（渡部・桜井 一九八四・一一五―一二七）。しかし、そのような適応は単なる自然環境への適応としてとらえるべきではなく、自然環境に対する人間の挑戦として受け止めるべきであろう。先見的に自然環境の壁とそれ乗り越える人間側の能力に折り合いをつけて臨んだのではなく、そういう前提なしに人間側から果敢に自然へと挑んだ結果なのである。その挑戦のなかで、多くのものが失敗し、試み自体が徒労に終わったものは少なくないだろうが、現実、持続性をもつて定着したものもまた少なかったのである。

湖羊はそのような自然への挑戦の一つと考えられる。ヒツジ飼育に不適な自然・社会環境下、舍飼という工学的適応を行い、品種特性の改良という農学的適応によつてそれは完遂された。これは、人々の並々ならぬ意欲によつて生み出された智慧なのであつて、その成立は必ずしも必然ではない。現在まで連綿と持続されるが故に、適応的と我々の目には映るが、それは嘉湖地方の人々の絶え間なき奮闘と試行錯誤により獲得されたものなのである。自然へ挑戦しそれを人間の管理下へ内包していく欲求と努力は、宋代以前にも存在していたことは間違いない。しかし、宋代以降、特に明清代を通じて、以前にもましてそれが加速されて、自然の改変、支配が展開されてきたのである。この時代は、単なる社会経済的な画期に止まらず、人間が自然へアプローチする方法、意欲、思考といういわゆる自然観の大きな変革期と考えられるであらう。¹⁵⁾ 自然にしたがうのではなく、自然と争うという姿勢には注目せねばならない。

さて、以上のように湖羊飼育の「契機」を宋代に求めるならば、その「成立」は明代にあつたと見なすことができる。そしてそれは明末清初の頃には「完成」されたようである。その成立過程は、湖羊のおかれた歴史的状況に大きく影響を受けている。すなわち、自給自足的な生業経済様式は衰退し、新たな商業経済が席卷するという時代状況である。湖羊飼育の成立は、中国明清代にみられる商業的農業の発展と軌を一にするものであり、湖羊は綿花、クワ、

木竹樹皮、タバコ、茶などの商品作物と同じ位相に存在する動物であったのである。その意味で商品家畜といえるもので、経済動物のかなり極端な表出型ととらえられよう。「換金性の高い商品作物はすべて経済作物」(川勝 一九九二:一〇二)であったこの時代、動物としてその潮流から無縁ではいらなかったのである。その点では、ブタしかり、ニワトリしかりである。ただヒツジ飼育に関しては、この地のように狭隘な空間に人口が奔めき、過度に園芸集約農業を営むような環境には本来、その牧畜的家畜性からそぐわないのであり、その意味でかなり冒険的であるといえる。その点において、農業が高度に商業化した状況は、冒険的なことに挑戦する大きな動機付けとなりうる。

この中国明代における農業の高度な商業化を、国家の強要する土地制度の緊縛強化と過重田賦への対応手段と指摘するむきもあるが、これは一面において正しいとしても、その対応を「消極的家計補足手段」(西嶋 一九六六:八六二)ととらえる見方には、筆者は容易に組みすることはできない。土地制度と商業資本のもとに析出された零細過小農土地占有者である佃戸層は、確かに国家や地主層による抑圧と収奪に苛まれていたであろう。だが、農業の商業化は、この地の農民を、消費文化を基底で支える供給者として独り留めおくことはできなかったはずである。当然、農民も幾ばくかの消費文化の受容を行い、消費者として振る舞う場面もあつたに違いない。⁽¹⁶⁾

そうなると、農民の生活を満足させる、あるいは豊かにする、幸福と感じさせる貨幣、消費財、エネルギーの絶対的な必要量は、生きていくのに必要な最低必要量よりも上方に修整されていたに違いない。すなわち生活に余剰を見いだし、上昇しようという志向性が、この時期には働かなかつたとは考えられないのである。嘉湖地方の地方誌には、時折、「華侈」、「奢侈」な風俗が描かれているが、そのような風俗を生み出す、あるいは支える経済状況が既に農村社会に浸透していたと見なさずにはおれない。それならば、生業経済から商業経済へ移り変わった段階で、彼らの商業

的農業は単なる「消極的家計補足手段」ではなく、自発的な「積極的家計拡大手段」へと移り変わったととらえるべきであろう。綿作などに代表される商業的農業の意義は、川勝守が指摘したような「農家の営農意欲、農民的智慧の發揮」(川勝 一九九二・一八四)という側面にこそ、まず認めるべきであり、そのなかで湖羊の誕生を位置づけなければならぬのであろう。

湖羊飼育は商業経済のなかで、積極的に自家の生活レベルを向上させようとした農民の意欲のあらわれであり、湖羊の飼育形態、飼育目的、繁殖形態、品種特性はその意欲を満たすための智慧が發揮された結果であるといえるのである。湖羊は長きにわたる歴史のなかで、その性質を変容させ、特定の品種として固定されてきた。その変化の道筋は、社会状況、自然状況にまさに適合したものととらえることができる。動物の性質、そしてそれを管理する人間の接し方に、それを取り巻く歴史がまさに凝縮されているのである。

*本研究は、一九九二年度文部省科学研究費補助金(国際学術研究)「環東シナ海(東海)農耕文化の民俗学的研究」(研究代表福田アジオ)、および一九九五年度文部省在外研究「中国・江南地域における家畜動物の文化史的研究」の調査に基づいたものである。調査にあたり浙江省文聯、桐鄉县政府、羅家角村・木橋村の方々に多大なるご高配を賜った。厚く御礼申し上げたい。また、一九九六年調査時に同行いただいた華東師範大学中文系陳勤建教授、浙江省文聯王恬副秘書長、桐鄉市文化館徐春雷副研究館員、湖羊の詳細な農学的データをご教示いただいた浙江省農業科学院朱富雲副主任には、各種の配慮、有益なご教示を賜った。合わせて御礼申し上げます。

1 石門鎮利星村は、中心市街石門鎮の東約一・五キロメートル、県の中心部梧桐鎮の西一〇キロメートルのところにあり、一五の自然村が点在する人口一六八四人、戸数三八六戸（一九九二年調べ）の行政村である。筆者はその内、自然村羅家角村で調査を執り行つた。また、梧桐鎮聯新村木橋村は梧桐鎮に隣接する農村で、人口八一人、戸数二二戸（一九九六年調べ）となっている。筆者は、羅家角村およびその周辺部において一九九二年九月約一週間、木橋村およびその周辺部において一九九六年六月から七月にかかる約三週間調査を行つた。滞在期間に様々な制約があつたため、一部の情報は断片的にならざるを得なかつた。

2 ヤンバン、ツーパーンの柱には「六畜五聖」の文字と神像を印刷した「五聖紙馬」と呼ばれる神札を貼り付け、家畜の守護神として崇めていた。年越しなどにこの前で儀礼を行うほか、ブタや湖羊の病氣時にさらにこの神に祈願する。

3 蔣兆光、何錫昌はフーヤン飼育において、選択的に重要視される草本類として次の植物をあげている（蔣・何 一九八五：七二―七三）。なお、学名は『中国飼用植物志』全五巻（中国飼用植物志編輯委員会 一九八七―一九九五）、『浙江植物誌』全八巻（浙江植物誌編輯委員会 一九八九―一九九三）によつた。紫雲英（*Astragalus sinicus* L.）' 故枝子（*Lespedeza bicolor* Turcz.）' 野豌豆（*Vicia angustifolia* L.）' 鶏眼草（*Kummerowia striata* (Thunb.) Schindl.）' 苜蓿草（*Medicago* 属のなかま）' 鉄掃帚（*Lespedeza cuneata* (Dum. Cours.) G. Don）' 牛鞭草（*Hemarthrica sibirica* (Grand.) Ohwi）' 白茅（*Imperata cylindrica* (L.) Beauv. var. *major* (Nees) C. Hubb.）' 狗尾草（*Setaria viridis* (L.) Beauv.）' 野燕麦（*Avena fatua* L.）' 蟋蟀草（*Elyusine* 属のなかま）' 雀麦草（*Bromus japonicus* Thunb.）。これらのはイネ科とマメ科の植物である。また、それらの草本類が不足した時など、木本類の梧桐（*Firmiana platanifolia* (Linn. f.) Marsili）' 楡（*Ulmus pumila* L.）' 槐（*Sophora japonica* L.）' なごや' サンシユエイ（三水' 三つの水草）と呼ばれる水草類' 水生（空心蓮子草' *Alternanthera philoxeroides* (Mart.) Griseb.）' 水浮蓮（*Pistia stratiotes* L.）' 水葫蘆（*Eichhornia crassipes* (Mart.) Solms）' などを利用するようである。

4 夏至後の第三庚の日を初伏、第四庚の日を中伏、立秋後第一庚の日を末伏といい、その三つを合わせて、三伏と呼ぶ。一年で最も暑い季節である。また、冬至から数えて最初の九日間を一九、次の九日間を二九、次の九日間を三九といつて、さらにこの二七日間を合わせて三九と総称する。

5 現在では、欧米諸国の動物愛護運動のため皮革需要が落ち、輸出品としての湖羊の重要性が落ちつつあるという。実際、一九九六年の筆者の調査時点では、シャオフーヤンピの価格は低迷し、その生産は落ち込みつつあった。一方、上海、杭州など近隣都市部のヒツジ肉の需要は年々増加しており、成ヒツジ肉価格が高くなってきた。そのような状況のなか、皮生産から肉生産へ移り変わろうとする試み、すなわち成ヒツジ肥育がみられるが、飼料の関係上、個人的な農民生産においては生産量の拡大には繋がっていない。

6 たとえば、アフガニスタンのパシュトゥン遊牧民では、種オスと成メスの比が一对一〇〇が理想型とされており（松井一九八〇・五三）、またイタリア中部山村の移牧ヒツジ群は種オス一頭に対し成メス五〜六〇頭の比になっているという（谷一九七六・三〇）。そのようなオス・メス比を構成させるために、これらの地では子ヒツジ段階におけるオスの大量屠殺が行われている。特に、パシュトゥン遊牧民など西アジアで飼育されているカラクール種のオス子ヒツジは、生後、ごく少数の種オス候補を除いてすぐに屠殺され、その皮はイスラム世界で珍重されるアストラカンの帽子の原料となり、高値で取引される（松井一九八〇・五三）。生後間もない屠殺とその皮の利用という観点からみれば、それは湖羊ときわめて類似しているが、カラクール種の場合、あくまで群れ管理技術の一環として行われているのであって、そこで生産される子ヒツジの皮は副次的な生産物と見なした方がよい。

7 湖羊は、多産性、通年繁殖性、多胎性など、他のヒツジ品種に比べ特異的な品種特性を有している。この品種特性も、湖羊のおかれてきた商業的農業と密接に関わるものであるが、紙数の制約上、本稿では論究するに至らなかった。別稿においてその詳細は論究する予定である。

8 李群によると、現在の蒙古羊系(中国の研究では安易に蒙古羊の名が使われているが、当然現在の蒙古羊も、長い年月のなかで変化してきたと考えられるのであって、前提としてこの語を用いるべきではない)に連なるヒツジは、紀元前より中原一帯に導入されていたとする。しかし、西晋末年の第一次人口南遷期には揚州や徐州への移動が中心であったことや、文献・発掘資料などの状況からみて、この際に、湖羊の基礎となるヒツジが来入したとは考えにくいとする。その後、隋唐代、北宋代を経て南方への拡散の可能性は否定しないものの、人口の大量移動がこの時期に発生していないことから、湖羊の基礎となったヒツジの来入を南宋の第二次人口南遷期とする見解をとっている(李群 一九八七・三八六―三九一)。

9 現在消出の宋初淳熙年間(一一七四―一一八九)の『呉興志舊編』を指す。

10 李群は蒙古羊に黒斑のものが五パーセントほどみられる例、あるいは汚れに注目して、蒙古羊系のヒツジの到来の根拠としている(李群 一九八七・三八七)

11 中国のヒツジは、その特性から短脂尾型系(蒙古羊など)、細短瘦尾型系(西藏羊など)、肥臀型系(哈薩克羊など)、長脂尾型系(大尾寒羊、同羊など)の四大系統に分類される。湖羊は、そのうち蒙古羊、小尾寒羊などと同じく短脂尾型系に分類される(中国畜産家畜品種志編集委員会 一九八九・一七一―一八)。その尾は確かに扁平で円形に近いが、かなり小振りで脂肪尾の利用には不適であり、現実には現在の湖羊において利用する習慣はない。脂肪尾の利用についてはむしろ、大尾寒羊、同羊などの長脂尾型系のヒツジにおいてみられる。したがって『本草綱目』の「湖羊」についての記載は簡単に湖羊とは結びつけられない問題をはらんでいるのである。宋代から清代にかけた地方誌にも、やはり「湖羊」の文字が多くみられるが、その「胡」とは古代の匈奴、羯、鮮卑などの少数民族を指すのであり、湖羊が北方から移入されたとする言説と密接に関わるイメージが投影されているものと思われる(李群 一九八七・三八八)。文献上は「湖羊」という表記は散見できないといつてよく、「胡羊」、「呉羊」という形で表記されることが多い。これが現在のような「湖羊」に変わったのは、発音の近接性ととも、外来品種の在来化ともとらえられるのではないか。すなわちヒツジに対するイメージの変質であ

る。

12 この記述は明嘉靖『嘉興府圖記』にもみられる。

13 同様にブタの飼育を奨励する俚諺として巻上、蚕務六畜附、九條には「古人云養了三年無利猪富了人家不得知（古人いわく、ブタを三年飼つても利は上がらないが、それでも家が富む理由を人々は知らない）」と述べ、農業と養豚の結合の重要性を沈は指摘している。また、同一三條で「羊壅宜於地猪壅宜於田」と、ヒツジの肥料はクワ畑に適しており、ブタの肥料は田に適していると、家畜ごとの肥料の使い分けについてふれている。現在ではそのような細かい使い分けはなく、ヒツジの肥料も水田へ施肥されているが、当時はヒツジ飼育と養蚕との結びつきが強く意識化されていたのであり、商業的農業に占めるヒツジ飼育の重要性が推し量られる。

14 『沈氏農書』に描かれるヒツジ飼育の特徴は、労働力に関するコストの軽減、つまり労働力を外部からの雇用で賄うのではなく、家族内部で充足するという、あくまで小農の家族経営形態を論述するものである。同書巻上、運田地法、一二條では、ヒツジを飼うには草刈りに人を雇わなければならないが、冬から春の間は草がないので、雇うのは食料の無駄づかいであると、家族外労働力を利用することを極力さけるように指摘している。

15 宋代は、花鳥魚虫文化と呼ばれる動植物飼育文化の成立期でもあり、たとえば、金魚の普及や、鬪蟋蟀コイロキリの普及などのように、農村部に限らず都市部においても自然を内包化する試みが行われていた。

16 一七世紀初頭、同じく長江デルタに位置する蘇州府常熟縣において水利工事を行った知縣耿橘の「開河法」十一条（『常熟縣水利全書』）には「常熟民素驕侈」とあり、この「驕侈」という言葉について、濱島敦俊は「決して奢侈一般を意味せず、小農民経営内部に商品生産が定着した情況の一つの表現」（濱島 一九八二・一七八）と指摘し、この頃には、飯米の獲得という生業経済的魅力によっては農民は動かないほど、商品経済の展開による貨幣経済の浸透が進んでいたことを明らかにしている。当時の風俗からは、さらに、奢侈一般も含んだ消費意欲の増大をも看取できうる。

〈引用文献：著者アルファベット順〉

- 安志雲・李有龍「關於湖羊飼養歷史的查証」『中国農史』一四—一、農業出版社、一九九五年
- 費孝通『中国農村の細密画』（小島晋治ほか訳）研文出版、一九八五（原著 Chinese Village Close-up, New World Press, Beijing, 一九八三年）
- 福井勝義「牧畜社会へのアプローチと課題」『牧畜文化の原像』日本放送出版協会、一九八七年
- 濱島敦俊『明代江南農村社会の研究』東京大学出版会、一九八二年
- 蒋兆光・何錫昌『湖羊』農業出版社、一九八五年
- 川勝守『明清江南農業經濟史研究』東京大学出版会、一九九二年
- 李群「湖羊的来源和歷史研究」『農業考古』（陳文華主編）一九八七年第一期、農業出版社、一九八七年
- 李志農『中国養羊学』（李志農主編）農業出版社、一九九三年
- 松井健「パシウトウン遊牧民の牧畜生活」『京都大学人文科学研究所調査報告』三三、京都大学人文科学研究所、一九八〇年
- 森彰『図説羊の品種』養賢堂、一九七〇年
- 西嶋定生『中国經濟史研究』東京大学文学部、一九六六年
- 石声漢『中国農書が語る2100年』（渡部武訳）思索社、一九八四年（原著『中国古代農書評介』、農業出版社、一九八〇年）
- 高橋孝助・古厩忠夫『上海史』東方書店、一九九五年
- 谷泰「牧畜文化考」『人文學報』四一、京都大学人文科学研究所、一九七六年
- 梅棹忠夫『狩猟と遊牧の世界』講談社、一九七六年
- 渡部忠世・桜井由躬雄『中国江南の稲作文化』日本放送出版協会、一九八四年

浙江植物誌編輯委員會『浙江植物誌』全八卷、浙江科學技術出版社、一九八九～一九九三年
國家畜家禽品種志編集委員會『中國羊品種志』上海科學技術出版社、一九八九年
中國飼用植物志編輯委員會『中國飼用植物志』全五卷、農業出版社、一九八七～一九九五年
鄒介正「我國古代養羊技術成就史略」『中國畜牧史料集』（張仲葛、朱先煌主編）科學出版社、一九八六年